

聖書：Ⅱペテロ 3：10～13

説教題：新しい天と新しい地

日時：2018年5月6日（朝拝）

ペテロの手紙第二も終わりに近づいて来ました。今日と来週で読み終える予定でいます。ペテロは世界の歴史の最後の日について書いています。ある人々は、この手紙が書かれた当時すでに「キリストの再臨など起こらない！」と書いていました。従って最後のさばきなどもない。だからその日を恐れて歩む必要はない。そして不道德な歩みを肯定して書いていました。しかしペテロは前回の9節で、その日が遅れているように思えるのは、神が忍耐しておられるからだと言っていました。ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを真心から望んで日を延ばしてくださると。「しかし」とペテロは今日の節を続けます。だからと言って、いつまでもその日が来ないわけではない。神の忍耐と寛容が終わりとなる日が来る。

まず10節で言っていることは、主の日は盗人のようにやって来るということです。マタイの福音書24章43～44節：「泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」泥棒は突然やって来ます。こちらが予期していない時に来ます。ですからその日はまだ来ないと言って霊的に眠りこけた状態にあると危ない。盗人のイメージが使われているのは、泥棒に入られると非常なショックを受けるからでしょう。用意していなかった人にとって主の日はそのような日となるのです。

そしてその日について恐ろしいほどのことが語られています。まず「天は大きな響きを立てて消え去り」。ヨハネの黙示録6章14節：「天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり」。二つ目は「天の万象は焼けて崩れ去り」。マタイの福音書24章49節：「太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。」三つ目は「地と地にある働きはなくなってしまう」。あるいは欄外に「暴かれます」という訳がある通り、ここは「見つけ出される」「さらけ出される」という意味である可能性もあります。このように今現在の秩序が根本から揺り動かされ、すべ

てがひっくり返されたような状況が生じると言われています。

さて私たちはこのような聖書の表現をどう考えたら良いのでしょうか。これは今の世界がゴミ箱に捨てられるかのように廃棄され、全く新しい別の世界に置き換えられるということなのでしょう。ペテロはここでははっきりとそのことについては述べていませんが、聖書全体から合わせて考えるべきことがあると思われます。イエス様はマタイの福音書 19 章 28 節で、再臨の日について「世が改まって人の子が栄光の座に着く時」と言っています。またペテロも使徒の働き 3 章 20～21 節で「回復の時」、「万物の改まる時」と言っています。そしてはっきりしているのはローマ書 8 章 19～22 節の言葉です。そこでパウロは、造られたこの世界には望みがあると言っています。神の子どもたちが将来の栄光に達する際、その栄光にともにあずかることをこの被造世界が首を長くして待ち望んでいると。つまりこの世界は廃棄され、破滅させられるのではなく、人間とともに贖われるということです。神は目的を持ってこの世界と私たち人間を造られました。その神がこの世界をゴミ箱に捨てるように扱われたなら神の負けになります。悪魔が神の計画をぶち壊すことに成功したことになります。しかし神はそうはさせない。神は人間を捨てないばかりか、この世界をも取り戻されるのです。ではここで言う「火で焼きつくす」という表現はどう考えた良いのでしょうか。火は聖めの働きをするものとして聖書でも用いられています。ですから不純物を焼き尽くし、徹底的な聖めをする神のわざとして考えることができます。それは確かに激しいさばきでもあります。しかしそれはそこにあるもの全部を滅ぼすのではない。天国に相容れない、この世のものを焼き尽くし、そのプロセスを経て、全く新しいと言えるほどの見違えるような世界を取り戻す神のみわざのことが述べられていると取るのが良いのではないのでしょうか。

さてこのことを踏まえて私たちはどう生きるべきかということをペテロは 11 節から語ります。この世のものはやがて崩れ去ります。それらは火で焼きつくされて残りません。この光に照らして私たちはどういう人間であるべきか。ペテロはこれら崩れ落ちるもののために生きる人であってはならないと言います。私たちはこの世にあって周りから様々なプレッシャーを受けます。この世の人々と同じように歩むように、この世の人々と同じ考えで歩むように、この世の人々と同じ思考パターン、同じ言葉、同じ流行、同じ振る舞いをして歩むようにと。しかしこの世のものは崩れ落ちるのです。それらは

火で焼かれてなくなるのです。そのことを考えれば、どうしてそんなことのために自分自身と持ち物とエネルギーをささげるべきでしょうか。むしろ 12 節に「そのようにして、神の日が来るのを待ち望み」とあるように、間もなく来る新しい時代に向かって、その世界にふさわしい聖い生き方、敬虔な生活へと進むべきではないでしょうか。

さてペテロは神の日が来ることを受身的に待つだけでなく、積極的にその日が来るのを早めなければならないと言います。どのようにしてそれができるでしょう。9 節に主はあなたがたに対して忍耐して、その日を延ばしておられると言われました。ですから主にこれ以上、忍耐させない状態に私たちが早くなることによって、その日を早めることができることになります。具体的にその一つは私たちが悔い改めの生活に一層進むことです。聖い敬虔な生活へと進んでこれ以上、主をお待たせしなくて良い状態に達することです。また福音宣教に励むことによってとも言えます。マタイの福音書 24 章 14 節：「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」またイエス様は主の祈りにおいて「御国が来ますように」と祈るようにと教えられましたから、その祈りによってその日を早めることができるとも言えるでしょう。いずれにしても主の日が来るタイミングは私たちのあり方とも関係しています。そして私たちはその日を早めることができると言われています。とするなら、私たちは他人事のように「主の再臨の日はなぜ遅いのか」などとは言えません。遅いなら、それは私たちに責任があることとも言えます。私たちが主にさらなる忍耐を強いてしまっているからであると。そうではなく、御心にかなう歩みを通して、その日を早めることが私たちにはできるのですし、その日を待ち望んでいる者として、そのように歩むように！と勧められています。

さて最後に、その日が来たらどのようなことが起こるかということが 12 節後半から 13 節に記されています。まずさばきの様子がもう一度記されます。「その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」先に見た 10～11 節の言葉とほぼ同じ表現です。それに「焼け溶ける」という表現が加わっています。激しい言葉です。しかし最後の 13 節は肯定的な描写で締めくくられています。「しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」神のみわざの究極的な目的は新しい天と新しい地の出現です。これは「神の約束に従ったもの」

とされています。イザヤ書 65 章 17 節：「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。」 同 66 章 22 節：「わたしが造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くのと同じように、——主のことば——あなたがたの子孫とあなたがたの名もいつまでも続く。」 この新しい天と新しい地は、先に触れたように、今の宇宙と全く別物としての新しい天と新しい地ではないと思われます。今の天地とやがての新しい天と新しい地との間には大きな違い、非連続性が見られますが、同時にリニューアルという側面のあることも聖書は示していると思います。神ははじめこの世界を非常に良いものとして造られました。そして神はこの世界に目的を持っておられました。しかし人間の墮落により、この世界は本来の輝きを失い、呪われたものとなりました。しかし聖書が示すメッセージは、神はだからと言ってご自身の創造のわざを無にはされないということです。神は御子キリストの贖いによって、私たち人間を罪の呪いの下から取り戻してくださるばかりか、この世界をも本来の状態へと回復されます。やがて現れる「新しい天と新しい地」は最初に造られた世界が本来目指していた世界であり、その輝かしいゴールなのです。その世界を神は取り戻されるのです。

その新しい天と新しい地についてヨハネの黙示録 21 章～22 章に記されています。そこにはもはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもありません。またそこは「義」が住むところであると今日の箇所で言われています。今、私たちが住んでいるこの世界には罪が横行しています。悪が支配しています。それためにあらゆるところに悩みがあり、叫びがあり、悲しみがあります。しかしこの世界は火で焼かれるというほどの厳しい聖めを経て、ついに一切の悪が除去された「義」の世界として現れます。その日が必ず来ること、これこそ私たちの希望です。この約束ゆえに私たちは将来に対して根本的な楽観主義を持つことができます。苦しいことはこれからも色々あります。しかし神が約束に従ってこの日を最後に来たらせてくださる。そして信じ従う者たちを、ついに完成する新しい天と新しい地に入れてくださる。この約束を前にして、私たちはどのように今日を歩むべきでしょうか。そのことが次回見る 14 節以降で述べられます。

神はこの世界を投げ捨てず、私たちとこの世界を贖う約束を与えてくださいました。そしてその約束に従って、ついに新しい天と新しい地が最後の日に現れます。しかしそ

の前に、天国には相容れない、地とそれに属するものはみな焼き尽くされ、崩れ落ち、消え去って行きます。そういうプロセスが先に来るのです。私たちはこのペテロの言葉に導かれ、間もなく過ぎ行くこの世の事柄のために生きるのではなく、やがて来る新しい時代に目を上げて、その日を待ち望む歩みへ進みたいと思います。来たるべき御国の価値観が今日ここでの私たちの生き方を決めるものとなりますように。またその歩みによって、主の日が来ることを早める者でありますように。そしてかの日が来た時には、盗人に押し入られた人のように慌てふためき、衝撃を受ける者ではなく、喜んで主をお迎えし、義の宿る新しい天と新しい地へと導き入れられる幸いな主の民の歩みへ進みたいと思います。